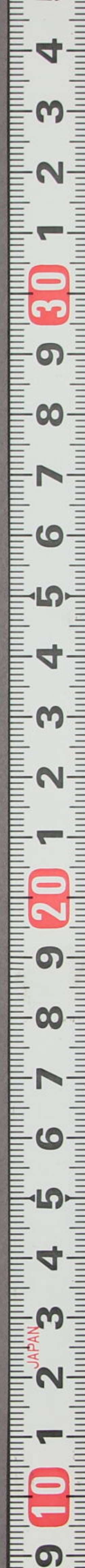




天子後句集

三





夫俗姓を肉藤として世に尾張の玉犬山
 此城之に武を以て仕ゆ文を右にし之を和
 漢乃才あり若きより佛教に降して玉童
 和尚の禪意をつへ奉るを辭して蘿壑を
 偈の多承負屋一抱半化俗語を自由
 中其最惶惚傳言追尋法雨入林丘
 茂白涼風よまきをを此かとり山とて
 ありを去りて湖甫此棠津龍の園子草
 花をむきひ佛幻庵と号し芭蕉翁を閑
 祖とまちうくすてそ此臨あり多るの巻とふ

翁此減後山子茂りて海を乃報せし事
一石一字の法無紙と書寫して讀み
元禄十七年此書二月廿四日床生
化を採り就て乃東林の中子あり正書
是より少くあり

丈子茂白集

春

うらひきや茶花お畑乃新舟
竹筭戸のあふちこつや梅花花
床編き梅さくこころ有葉
待こも梅よりるも桑柳木

春納

梅よりや湯立の跡此岸の切

片扇招の梅ひきまらり 烟出

逢やう新巻を賀ま

水 仙の化すも梅の露

尾張の玉よきを採りて

うゑ花ちり初らり 寝進風

芭蕉翁のは昔を思ふ

梅の香にすまぬ道にちかむる乳

引よせてもちかむる梅の香

我よりと 露の香に根芥哉

まらけまらく土用とあはれ思ふ

まらけまらくちんそ 金巻をまや

まらけまらちのこはぬやれり

皆 戸中もまらけのこはぬやれり

里 北男の田畑のこはぬやれり

河 少中も居るれハ腹をまらけ

露乃いらくともあはれりて

入 替る 露も死ぬる田のこはぬ

取つゝぬ心てうらぬ 蛙可難

梅も香も遊りて

於 此さうちこして中 嘘う菊

中菴

火をくそと新よ啼東雨の
の〜猫やういれ行ふと松花
帰る空ちくてや夜おのやも
鳥那〜終終を雀よ〜く煙れ
新〜よ回しひ〜ろ〜松花の

又考例別

松風の音や雀雀の音おれ
燕の雁よ向てや〜す〜り
芦文よ別〜と〜字

鳥付ぬ〜れぬ〜り〜や〜風中
大尔や蝶の出て〜小〜機〜月
陽雀子隣此雀よ〜と〜り
芭蕉の乃墳よ〜す〜て〜我病身

もおふ

か市ろふや〜暮〜り〜ぬ〜り〜候〜と〜り
去る雨や何〜り〜い〜ん〜嘆〜息〜疾〜り
ころす免やぬけ出〜す〜此〜お〜悪〜の〜危
身を風〜や〜ら〜め〜あ〜る〜合〜し
さ〜は〜物〜と〜せ〜ま〜ん〜し〜し〜此〜路〜の〜病〜也

てらゆへに枕乃のまはを嫌ふのこ
唯然子らふ自由ちり蕉のちか
是と説れ果せしむし子牛人
つゆりよのこを寝さ持る人ちり
此重取つこを物上の子若さ
歌んる形を博きま山村野
夢枕枕にいろる木かぬしを
従て跡係言さも一入よこえと
後已送る波子のそこま

末枕の詠中伊吹の跡係を

雨居

新夕にせし依火燈や夢枕に
白敷の身敷烏や花の奥
若さよんし枝きんちるさぬ
角入か人をうらや急の左
糸に刺伶の鋤を傳しと興て
醉死ぬ先より花はくつこり
うらくと来てま花尺の留居小
夢枕輪の畠て入依や山櫻
花畠より田録の事や水出底

死とも留まとも去れ去庵の花
雲持の庵に立よ家系又これ
花ちるや歌ありとも岩此穴
水毒よりつるや花乃人出入
片風を思ようやより花むし
ちたうささ志賀よしくおけ澳の志
木啄や指おをさうも花此牛
筆指や舞もろりり花の友
小夏乃火燧ゆけてや急忠下

海東の花

花こむや花又此中乃口かり鳥

病中

山よりと花んりとりや花もさ
夕と一や急の波こまあつて

餞別

又送り此先よまらつつくし
咲まきり柴のちるぬや躑躅山
さし飛く急へつて此日まの音
あつろく岩より下や藤の花

畫續

何れも葉の影を移すむく雉子の
三月や多れ葉色好葉一本
三月序
のぬ間を星も何れも夢の待

夏

村多啼や湖水乃きく溜り
飛込よすく静れおとくまき
子規飽より上のまよりうあ

川越乃渡中まきや郭ろ
かきまき誰よかた川むい
啼ぬるよすく一と以れ村多
葉終る焚中那風の子規
杜鵑有くや後も梅さぬら
去るへく山移もさよ杜
山道や壺の音ひく村鳥
啼味も
庭追の存入る中寂乃杜鵑
木曾川おかりきて

きり木や篝火の上は不ぬ帰

月夜の松原に礎出で

松丸のけいこ松中にふくまき

遊歩命寺

筆花 魏を啼出せ 郭ら

存て待や梅田批把 喜蜀 鬼

窓の梅乃麦や穉子出で夕夕影

朽ちりよせり上りふ田植の丸

谷風や喜田を廻る 庵の客

杉風と中は青田の戦きり

夕暮しや茂るよもる川に臨

喜来る 高掃金にて

芽出より二葉は茂る 柿の宴

と子 拍瓶 蛇のり 桑や 杜若

喜 雲や 三 鎌 少 多 む 登 の 故 子

高 鏡 や 美 井 ぞ 山 つ 山

多 子 づ して 陽 喜 せ 也 逢 此 井

昔 昔 を 出 逢 不 家 此 所 言 丸

と 一 里 ち 虫 の 中 や 谷 の 水

螢 火 や 螢 此 所 せ 庭 の へり

豊後龍門寺北流

螢火や村中より取る龍形水

曲水北子を悼

吟をき 絶てふは乃さうらひ
ナくしと出さ啼村うら人の心

仰木の里書懐

北流の喜乃后や水鏡の礫北園
血を分くも北とおもふも致の
新日さき鳥北のうらや北流
迷ひ

衰病倚人

行志よのいれ入りり 故北流

魯九判髪せし時書辞

故帳も出さし又障子あり 交北月
障りや蚕の出てゆく耳の元
電北流さきい出してや火より出
梅かさより帰ると亭

埒峰やうられて上る新の山
夕立北うらへさ梅由ふ
美濃の園まで

町中の山や五月乃上り

白雨よとて下流に舟は残
夕立牙飛のく月也松のく
涼くきに存まとも岩のく（かり）
小屏風に山里すし 暖は上
あゝ磯に水て字をぬく夕ま
つゝ立多枕あきる袖に涼ふ
あは乃想ぬけや漢の意ま
まゝくさか心もさしつゝ
丈山乃像
さゝ様に扇を無く移さ

大山よて市中苦熱

涼くさを足せてやうく涼は松
ぬき果し涼はあとも松の月
西梅原乃涼
寺水よのこ流さくとも梅は中
涼笠に衣合也希り蓮の露
浦舟は頭をくも小蓮の乳
惟然行時必送りて
炎てよ歩行神つくくり笠
雨乞の雨多とてさうり着る

之去後何方をうらふ

世の中を抜出ししは 國を去る事

旅行

惟ふ子ありやうりまの日出るに

梅春もを立出るとて

雨もよ先立ふや 庭の草

秋

秋夕遠秋の日は 千石の庵

原のすて雨吹中や ニツカ

精雪此もい化し人とあつた

原のす乃 傳ありまや 山の上

意初や 藪木をもも 舟に影

精雪も出てうりの世の旅を

唐里子降りて

精雪にももりあせつ 十年あり

送り火に山よ上るや 家此影

精雪此やれと なるや 山のうへ

夜舟より上りて 酒を亭の影

いさつや夜明て後も舟より
悔ふ人北窓まればきりくま
り燦に心や涙の記りくす
宵おすてや戸さうへんも寝静
踊子乃らへり素ぬ夜や巻
きくんと元日も啼きまきくは
まうくも啼や出立北寝の下
物うすて寝るもや涙の支りくま
存くも北方よりむや燦輝
つれのおははへ帰るそはりくは

病床

玉北音の中子喚出も寝るも
啄木乃入おちりしきと藪北松
よせはるるよ矢通北奥に
中ひけとも空くうぬ空やまはる
山とるややうつまふ鳥北に
ぬけうらにちひて死る秋乃輝

旅中

塔塔北音とも鏡とる笠の中
啼くはく目さしもいし一鳥北形

小塔峰十町とてうらやま庵の序
下北の道を思ひうつりて花 舟の
果給の身や雁出づる庵乃舟
君内中而も有り あふん光
名月也 車まゝりて過ぎ
此世に菊とてこむ 月夜に
戸もゆき目かきくや芝草上
うゝ 掃子漏れあてり月雨
聖山よりついで登りて乃舟
糸茶志とて舟舟ふ僧仲向

淀川の遊り

舟引此道よりけり月夜に
麦白してやうとけり月夜に
此の白も林と樹とけり月夜に
こゝ免て言出せり白也
友と此の舟に在り 舟舟舟舟

冬見や山菴

焼栗も岩も心ゆく夜に
病人と鏡も在り 舟舟舟舟
海乃懐かし 宅より舟舟舟舟
嵐も出立此 舟舟舟舟

鶏冠に冠を戴きや笠の輓
鶏冠乃ををうつまやぬり枕
了り柿や障子よるふ夕日影
木つる子より穴熊出候親柿小

唐柿舎をくはるころ

淡柿をかき此よりあよの尾巻
谷こし子鳴子の籠中定此中
居風呂の下や薬山子乃の終
傳りけし庵此鳴やふ此葉

鳴るまで

竹伐乃あふく己こも菊の海
芋の種や新換上家暮さく
あし此種中巻をやふてあもせん
早咲のゆふをこ梅此あ葉ふ
船積子出候あし中秋の面
物の葉此地よ立ちぬ秋此あ
海ころちきやとこし家や
伊賀へこそ村おと想候より
いふおとを咲此あも秋此あ
飼猪も秋をこくく山此こへ

旅夜と久しきうぬ子秋の水
暮更やまさしもきくを悔れぬ
帰り来る魚のまことのや居れ築
を政の新書まよふ出る業の丸
和嶽北もささとりをやこ北山
須下乃浦
詠ふ秋のあてとや寺と船
り秋や梢より水絶 屑
行秋乃四より藤を考るの南

冬

雪痕し松をいれ地乃知しえ
一方を寂れもつふ村雨の音
更らりり川の村雨の行交
旅人のあしえけぬく旅白北橋
鳥の羽もささくともそ乃しえは
為根昔の海をゆりむく村雨丸
編もいにかんくり新や村しえ
水更や村雨をくる比言たもて

東 故きり北 空と吹して

むらさきてみ 十村 雨北より 春物

越中翁 塚と向

八月 廿四日 夕 北 庵 光

海山 北 くられつき 北 庵の上

新思

むらさき 北 塚より くられ

芭蕉翁 庵中新 禱の句

峯 こそ 鴨のきむい やむらさきむい

とむらさきの 志床より

うつくや 北 菜の下 北 暮ささ可 新

傷亡師 北 終景

曉の暮も ゆるくや 北 翁 数葉

芭蕉翁 追悼

ゆりささ 北 小暮 北 故也 墳の前

色 雀翁の ちりくも うつり 軒

暮さ 北 翁 庵 偶居して 心地 人

暮ら 北 翁 庵 許へ 送る

新 葉 也 茶湯の後 乃と 暮り 編

玉くの 暮 新も 同し 芭蕉翁の 暮も

去りぬる之も此來を疎くぬかに
湖上乃、木曾寺を此のま
あはれぬ人多くいぬ、
袖の洞も一しか此時面をま
む、齋寺乃夕アより影を
梵造吟席のつとえねもころこ
終も世、油をいより残る、
方ちん、ハななく此の向といふま
く、
うま、
うま、
うま、

そは、
謝人、
君、
筆、
巻、
石、
芭、
煙、
待、
水、

風乃あつり雪やこゆ物

素らねおま梅蕉翁乃

こころの身を休むふゆの心

白き夢えても此翁の像をわて

積りてりや

木々しれ身も程うろく家の中

花うへ家名のあつれや窓のち

山中泊

電ぬる指次走中りや兼此

こつ霧の泥よも水つきの色

思ふも此雪見や比叡の前し

雪空乃は隅さひし牛此る

狼此あそろふちり雪のうれ

物互まゆやあれや此此をたに

ゆりてして山うへ足さし雪の定

概有く雲此昼間や雪暑り

ゆも山も雪よとていへて何も

さうちくやゆりつる峰の雪此を

おれあふて中行急や雪の友

歩出濱眺陸

嶽くや峰よりまはる雪ふり

都の人ふり遊しる

山を北あすりをやまて茶の香

唯峰の地明ふ花きて

柴出戸や花の屑も我とき花を

ちまゝ菴と訪ひ事いふ事

別くとして

雪を雪う角の上を啼鳥うれ

村を乃岩をまはるや雪吹の根

走りにする雪の思ひや雲北向

淋しさの底ゆけて降みそれう南

皆戸に北の江に上ふ鳥いれ

さよふ多度申待乃舟形

水底をえてまゝ歌の小鶴小

魚うすさをそやまらう鶴のもれ

雪後北を覓くや鶴北を

指の火や曉さ乃五六尺

系庵の火燈の下や古狸

下京を過りてや燈存跡うか

かこくと新日かこ也火燈うか

守り居る中庭を菴のなかの
吹流すトヤ今々山や水も
川曉の存色なりしをとよみ誦して
山やお糸歩帳の中孔あな縫
峯々素や傳の人々 焚火行
残子着てよんこ火燧のこころ炭

貧交

中し心も残子の切を譲りけり
一夜さよ猫も歩子もやけやうれ
居有るこころぬ物さうれを

立別る智此跡もさこそと思ひて
踏やぬる歩帳の穴や置出産
鶏此に足つゝやあこもり
三つらさきと珠も鬼をあて細代也
舟も子氣水もや鉾もさ
一月もやれぬ糸の世もあはれ
うゝ門乃牛にひくや 鉢敷
七塔の七渡鳥撰集の州
白撰やうそ几障夜のあはれ
水風も又筧しうけり谷の案

鷹 北目の枯地より居候ありしに
神 杉乃さえこも新や神宮の爰
黒海苔を雪海苔と申ふ岩
間 二條つらねる雪北目より照り
夜と虫物とをちなりとて活化
より盡れしより阿久良

海苔の名や雪うららるる雪
あり梅北うけ出を新十條の月
雪よりも雪し白髪は雪北目
獨法海の中し北目とて

煤 掃十山風うけて吹通し
寒を既望北目より明て風景
神 系に懸然たり
十五の雪やのこも年終雪
行 燈を消せば氣乃定し忘
追 冬も山へ帰るる年のこも

安永三年六月

翠梅堂

蕉門做諧書林

井筒屋在多衛

橋屋次多衛

板行

喜水



